

大学初年次の経験を豊かなものとするために

アレクサンダー・W・アスティン¹（横山千晶² 訳）

カリフォルニア大学ロサンゼルス校

1. 二つの環境上の尺度

本日お話ししたいのは、大学生を対象とした研究結果から読み取れる、大学入学初年次に経験する内容を豊かなものにする方策です。調査のほとんどは合衆国で実施されたとはいえ、判明したことの多くはほかの国の大学でも適応可能だと私は確信しています。

これからお話しするこれらの調査が目指す基本的な目標は、大学生活で生み出される成果が、大学での最初の1年間で体験される学問上の、あるいは非学問上のさまざまな経験によって影響を受けるのかどうかを見届けることでした。ここではさまざまな分野での学生生活の達成度を調査対象としました。つまり調査者によって学部生教育の達成目標に影響を与えると判断された数々の認知的・情緒的な測定尺度です。この発表ではこれらの非常に複雑な調査方法について詳しく論ずることはいたしません。基本的なアプローチは、初年次の環境がそれぞれの達成度に与える影響について評価する以前に、大学入学時の学生の「インプット」的な特徴を考慮に入れることでした。

この領域を研究する人たちは以下の二つの環境上の尺度を区別する傾向があります。つまり、「組織レベル」、そして「学生レベル」の二つです。組織レベルの尺度は大学の大きさ、財源、教員の特徴、そして学生間のピア・グループの特徴など、大学の組織全体の属性を測るものです。大学組織そのものが持つ特徴が初年次の学生の経験にどのような影響を与えるのか、調査結果を簡単に説明することから始めましょう。

2. 組織レベルの初年次環境への影響

(1) 影響力の2大要素—「ピア・グループ」と「教員」

おそらく調査結果のもっとも重要な点は、初年次の学生の認知的・情緒的な発達にもっとも大きな影響力を持つ要素を一つ挙げるとすれば、それは「ピア・グループ」となるだろうということでしょう。特にピア・グループの特徴、ピア・グループへの学生の関与の度合いは、学生の学問上・人格上の形成に関わる、事実上あらゆる局面で大きな潜在的影響力を発揮します。一般化すれば、仲間とより密に関わると、より好ましい成果が出るということです。

組織全般が学生の発達度に及ぼす影響力の中で続くもっとも重要な要因は「教員」です。数百校におよぶ単科大学・総合大学を調査したある研究では、対象機関の教員を総合的に調査し、それぞれの大学の教員の「傾向」値を割り出しました。その結果大学の教員に見られる二つの特徴が、学生の発達度に対して相反する影響パターンを生み出すことがわかったのです。一つの傾向値は「研究志向」です。教員の研究志向値は、その姿勢だけでな

¹ カリフォルニア大学ロサンゼルス校名誉教授、および元 UCLA 高等教育研究所所長

² 慶應義塾大学法学部／慶應義塾大学教養研究センター chacky@a8.keio.jp

く、実際の行動にもはっきりと現れます。より詳しく見ると、教員の研究主体性は、出版物の発行数、研究にかける時間、そして研究にどれだけ力を注いでいるかの自己申告を反映しています。つまり、研究志向値の高い教員は、多数の論文や著書を出版し、勤務時間のかなりの部分を研究に費やし、研究への従事を優先します。もちろん大学組織によって、この研究志向値の高低も大きく変化します。

もう一つの教員の環境尺度は「学生志向」値です。学生志向値もまた、教師に対する調査への回答に基づいて測られます。調査は7項目から構成され、それらの項目は主として、質問を受けた教員が、自分の同僚たちが学生の発達に興味を持ち、意欲を持って取り組んでいると考えているその度合いを測るためのものです。この要因を形成する代表的な質問事項は、たとえば以下のようなものです。「この大学の教師陣は学生の学問的な成長に関心がある。」「この大学の教師陣は学生の個人的な問題に関心を示している。」「オフィス・アワー以外に教員に会うことは容易である。」そして「学生と教師の交流を図る機会が多数用意されている。」

(2) 教員の研究志向値

教員の示すこのような二つの異なった尺度が学生の成長に与える影響にはどのようなものがあるのでしょうか？「研究志向」値の方から見ていきましょう。(Slide 1) 研究志向の持つプラスの影響は、唯一学生の統一試験のスコアに見ることができます。一方教師の研究志向値が高い場合、値も数ももっとも多い影響は、すべてマイナスのものです。もっともマイナス度の高い影響は、学生の教師に対する満足度に見られます。研究志向値は学生のリーダーシップ、パブリック・スピーキング能力、人間関係の構築力に対してもマイナスの影響を示しています。それだけでなく大学の成績、さまざまな文化的な催し物への参加、教育の質と大学での経験全般に対する満足度にもマイナスに作用しています。つまり、今最後に挙げた影響力を除いたとしても、教師たちが研究活動に多大なウェイトを置いている場合、大学は初年次教育に関する限り、大きなツケを支払うことになるのです。

(3) 教員の学生志向値

教師の「学生志向」値を見てみると、大変異なった影響のパターンを示しています。(Slide 2) もっとも大きなプラスの影響力は、教師、および大学での経験全般に対する満足度に表示されています。教師陣の学生志向値はまた、学生の学問の達成度においてもいくつかのプラスの影響を示しています。たとえば成績優等賞を授与されたり、ライティングや批判的思考力が伸びたり、分析と問題解決能力を身につけたり、学問能力全般で進展を見せているのです。学生志向度はまた、初年次のリーダーシップ能力の開発には、めだった貢献をしていません。かいつまんで言えば、このような影響力のパターンは、学生志向の教師陣をそろえていることで、大学1年生の認知的・情緒的発育に関して豊かな見返りがもたらされることを示唆しているのです。

合衆国においては、研究志向度が強く、学生志向度が弱い組み合わせを象徴的に示している大学は、もちろんのこと主だった公立大学です。この逆のパターンを代表するものは、主に小規模でそれほど財源に恵まれていない私立大学です。ただし付言すれば、研究に対する志向が強く、同時に学生への配慮も怠らない大学も少ないながら存在します。これらにはいくつかの財源に恵まれた選りすぐりの私立大学と数少ない小規模な私立の研究主体

大学が含まれます。

3. 学生レベルの環境的経験の影響

(1) 3つの種類の環境因子

次に初年次学生のさまざまな達成度に及ぼす学生レベルの環境的経験の影響についてどのような研究結果が出ているのかを考察してみましょう。研究対象となる環境的経験の項目が非常に多いので、私の要約は畢竟簡潔かつ簡略化しすぎるくらいがあるかもしれません。以下は3つの種類の環境因子を示していますが、これらは教育上の達成度全般を伸ばすための最大の鍵であることがわかった要因です。つまり初年次の「学生間交流」、「教師と学生間の交流」、そして「学生の学問への従事」です。(Slide 3)

(2) 学生間の交流

次に挙げるのは、学生の6つの達成項目ですが、これらは学生間の交流の度合いに応じてもっとも強く影響を受けると認められたものです。つまり、「リーダーシップ」、「パブリック・スピーキングの能力」、「学力全般の向上」、そして「批判的な思考力」、「文化的関心」、そして「一般知識」です。(Slide 4)

(3) 学生と教員間の交流

次に挙げさせていただくのは、学生と教員間の交流によってもっとも強く影響を受ける達成項目です。(Slide 5) 予測できることですが、学生と教員間の交流は、個々の学生の教員に対する満足度にもっとも高いプラスの影響力を及ぼします。学生と教員の交流はまた、大学そのものに対する満足度にも、そしてこれも予測できることですが、教育の質に対する満足度にも肯定的に働きかけます。この環境変数はまた、学生の大学院進学率のみならず学力の伸び率といったいくつかの尺度とも関係しています。ここでご紹介したいのは、直接的な「ロール・モデル」効果とも呼べる例です。つまり学生が個人的に教師とより密に交流することで、学生の大学院進学率と研究職への関心度が高まるということです。学生と教員間の交流が、大学1年生の物質主義的価値観に対してマイナスの影響を及ぼす、というのにも興味ある点です。

(4) 学業への従事

初年次の達成項目に対して肯定的に働きかける3つ目の学生レベルの要因、つまり学業への従事は、学生がどれほどの時間とエネルギーを学業に費やしているかという点から考察されます。学問への従事はほかのどの環境変数にもまして1年次の成果に肯定的な影響を与えるのです。(Slide 6) それは統一テストの点、大学院への進学準備、そして大学1年次のさまざまな経験に対する満足度だけでなく、あらゆる学問の向上に対して肯定的に働きかけます。学業への従事がマイナスの影響を示す分野があることにも注目しましょう。つまりアルコールの消費量、喫煙、そして物質主義的価値観に対してです。

4. 3つの教育実践の影響

次に多くの学生にとって大学初年次の経験を深めるとされる3つの教育実践について簡単に説明したいと思います。つまり、「記述式評価」、「学際的なコース」、そして「記述式の試験」です。(Slide 7)

(1) 記述式評価

特に関心を引く一連の影響が、記述式評価の導入によって認められました。記述式評価とは、教師が短いレポートを書いて、大学1年生の学業達成度を評価する方法です。これらの評価方式は、通常のグレード式評価システムの代わりに使われる場合があります。記述式評価は教員の多大な手間隙を考えると「労力がかかる」といえるでしょう。アメリカの高等教育機関で昔ながらのグレード式評価ではなく記述式評価を行っているところはほんの一握りしかありませんが、研究によると、1年生の学業成績に対して記述式評価を行うことはいくつかの興味深い影響を及ぼすことがわかっています。もっとも注目しているのは、記述式評価が大学教員職に対する学生の関心に大きなプラスの影響を持つことでしょう。これはどうしてでしょうか。この評価法ではおそらく学生のことをかなりよく知らないとの確かな評価を書くことがまずもって無理だからではないでしょうか。学業成績を記述式で評価できるほどまでに学生のことを知ろうとする教員は、評価対象となる当の学生たちから肯定的なロール・モデルとみなされるといえるのでしょうか。この結果が示すパターンから、「労力がかかる」とはいえ記述式評価は、学生と教員の交流の質を深めるだけでなく、学生が自分の指導者に対して積極的に自己を投影しようとする大きな可能性を秘めていることがわかるのです。

(2) 学際的なコース

もっともよく見られるプラス効果のパターンの一つは、学際的なコースの履修と関連しています。学際的なコースとは、通常二つかそれ以上の異なった学問分野を専門とする教師陣が、チームを作って一つのコースを教えるというものです。学際的なコースを履修することで、特に統一テストでの成績、1年次での満足度、そしてほとんどの学業成績の伸び率に対してははっきりとプラスの効果が見られるのです。

(3) 記述式の試験

予測できることですが、記述式の試験は選択式の試験に対して、初年次の学業成績では非常に異なった影響力を示します。記述式試験を頻繁に受けることで、学生のライティングの能力が伸びるのです。記述式テストはまた、実質的にほかのすべての学業成績の伸び率や満足度にもプラスの効果を示しています。対照的に選択式の試験を頻繁に受けていると批判的な思考能力だけではなく、ライティング・スキルの上昇にもマイナスの影響があります。一方では多くの選択式の試験を受けることで学生の物質主義的価値観にはプラスの影響が見られます。

5.3 つの達成項目への影響

これまで大学初年次のさまざまな達成項目に対して影響力を示す「環境的」要因から大学初年次の経験を見てまいりました。今度はいくつかの「達成項目」の点から見たこれらの根拠を取り上げて検討してみたいと思います。今回のプレゼンテーションではカバーしきれない非常に多くの達成項目がありますので、ここでは多くの大学教員が特に関心を持つであろう3つの項目に絞ってお話したいと思います。つまり「批判的な思考能力」、「分析と問題解決能力」、そして「文化的関心」です。

ここで私は少々時間をいただき、大学初年次で学生に身につけてもらいたいスキルとしてあらゆる教員が議論の俎上に挙げる3大学問スキルを対象にした際の、この研究調査結果を要約したいと思います。つまり「批判的思考能力」、「分析および問題解決能力」、そして「文化的な関心」です。(Slide 8)

(1) 批判的な思考能力

大学初年次に批判的な思考力の発達を促すと思われる環境因子に関する根拠をくまなく見ていくと、ほとんどの潜在的な影響力を及ぼす経験には、「評価のために記述式の試験を頻繁に受けること」、「レポートを書くために何度も推敲を重ねること」、そして「学生志向度の高い教員がいること」などが挙げられます。ほかのプラス要素としては、「理系のクラス、歴史のクラス、そしてライティング・スキルの向上に重点を置いたクラスを履修すること」、「クラスで発表を行うこと」、「教員の家に招待されること」、「ほかの学生と社会問題について頻繁に話し合うこと」、そして「学際的なコースを履修すること」などが挙げられます。(Slide 9)

(2) 分析および問題解決能力

分析および問題解決能力に対してもっともプラスの影響を持つ要因の中には、「数学や理系のクラスを数多く履修すること」、「非常に学生志向の強い教員がいること」、「教員によって添削してもらえらるレポートがクラスで課されること」、「グループで行う課題が出されること」、「頻繁に学生と教員が交流すること」が挙げられます。(Slide 10)

(3) 文化的関心

学生が大学に入学するために親元を離れることは、大学初年次で文化的関心を高めることに一役買います。この調査結果は住居環境の変化によって、学生がさまざまな文化的・経済的背景の人々と交流を図れるようになるという議論の後ろ盾になります。よく似た意見は大学キャンパスでアルバイトをすることによって文化的意識が高まるということを説明するときにも聞かれます。つまり、キャンパスで仕事をすることで、学生たちは実にさまざまな仲間の学生や教職員と接する機会を得るのです。文化的関心を高めるほかの環境上の経験には、「人種・民族問題に関してほかの学生と頻繁に話し合うこと」、「さまざまな文化圏の人々と交流すること」、「民族学の授業を履修すること」、そして「人種的・文化的関心を高めるワークショップに参加すること」などが挙げられます。文化的関心の向上にマイナスに働く要因としては、「学生として在籍する一方でフルタイムとして働くこと」や「テレビを見ること」などが挙げられます。(Slide 11)

6. 調査から予測される結論 その1

これらの根拠を考察するに際して、少なくとも二つの見方があるといえるでしょう。一方でこれらの調査は直接初年次のプログラムをよりよいものとするためにいくつかの個別の提案を提示してくれます。他方でこれらの根拠は私たちが初年次の成績評価システムを確立する際の重要なヒントを与えてくれるのです。たとえば評価に関していえば、これらの根拠は、「学びの環境」に関してできるだけ多くの情報を組み入れるべきであることを示唆しています。特に教えることと学生に対しての教員の姿勢のみならず、学生同士の交流の質と頻度、教師と学生の交流の質と頻度に関しての情報です。言い換えれば、ただ初年

次の教育「達成」度を高めるだけでは不十分なのです。もしも私たちが、これらの達成項目に関してその成果に影響を及ぼしてきたであろう個々の学生の教育上の経験が、この1年間でどんなものであったのかを理解するための基本的な情報を何も持っていないとすれば。

(1) ピア・グループの可能性

私の関心を特に引くのは、ピア・グループの持つ影響力について研究結果が示唆する可能性です。もしもピア・グループがある学生にもっとも大きな影響を与える要素の一つなのだとすれば、この事実をただカリキュラム運営法の計画だけでなく、初年次の学生の課外活動にも応用しない手はないでしょう。

たとえば教授法を例にとってみましょう。今までの初級クラスは講義主体で、クラスでの議論を少々、そして個々の課外活動を少々取り入れ、試験を行い、ABC方式の成績評価を行っていました。このような方式では、学生は大方、勉強は個別に行い、同級生は基本的にライバルとみなされます。しかし私たちが協同学習法と呼びならわすようになった方式では、学生たちは少人数グループで協同作業し、基本的に互いに教え合うことを基本とし、私たちの教授法的な資源はより豊かなものとなるのです。クラス内の調査では一貫して、協同学習法は従来の競争的方法によって達成されるよりも優れた成果を生み出していることを示しています。そしてピア・グループの影響力に関する私たちの調査結果は次のような説明をおそらく可能にしてくれるでしょう。つまり、協同学習は従来の競争的教授法に比べ、より有効である。なぜなら学生たちが学ぶ過程でより積極的になり、自ら参加したいという気を起こすからです。このように積極的に参加したいという意志は、少なくとも二つの方法で現れます。まず、学生たちは彼らの活動が仲間たちによって評価されるとわかると、より努力しようという気を起こすでしょう。そして2番目に、学生たちは仲間積極的に教えることで、より深くその教材を勉強することでしょう。

私たち研究者がカリキュラムの中身をこれほどまでに重要視する理由は簡単です。研究者のほとんどが、学校に入った初期段階で、先生によって、あるいは教科書の中身を通して紹介されるカリキュラムの内容を、たやすく咀嚼できることを自覚していました。そしてこの能力をクラスで、試験で、そして統一試験で発揮することで十分に報われてきたのです。研究の専門分野で私たちが達成できる成功は、しばしば私たちの関わる専攻分野や副専攻分野での高度に専門化した内容を習得する私たちの能力にかかっています。ですから私たちがカリキュラム運営委員に任命されると、本能的に教授法ではなく、カリキュラムの内容に傾いてしまうのです。

(2) マイナスの影響力を及ぼす要因

さて、初年次の達成項目にもっとも大きなマイナスの影響を与えがちな要因を次に見てみましょう。(Slide 12) 初年次の達成項目にもっとも多く明確なマイナス効果を与える環境的要素の一つが「親元からキャンパスに通うこと」です。自宅に住み、大学に通うということは文化的関心、リーダーシップ能力、そしてさまざまな文化的なイベントに参加することにもマイナスの影響力を及ぼします。またそれらは学部時代のさまざまな経験全般に対する満足度、そして初年次の教育プログラムに対する満足度にもマイナスの効果を示しています。

初年次の経験におけるもっとも重要なマイナス因子の 2 番目は、「学生が週何時間テレビを見ているか」ということです。人々のテレビ視聴習慣とテレビ番組を批評する人たちは、この強力なメディアが、学生たちの教育上の発育に対してマイナスの影響力を及ぼしていることについて長年議論してきました。そしてここに挙げるのはこれらの議論を擁護する経験的根拠です。特に興味を引くのは、テレビを見る習慣は学生たちの物質主義的価値観を強化すると推測される調査結果です。テレビコマーシャルのみならず番組の中で提示される圧倒的な物質依存の価値観や内容のことを考えると、このような影響力はおそらく容易に予測できます。また最新の調査の中には、過度にテレビを見ることが学生の精神的な発育に悪影響を与えるという結果を提示しているものもあることは、同じく興味深いものです。最後にテレビを見ることはまた、言語能力のテストでもマイナスの影響力を示しています。ここでも私たちは、過度のテレビ視聴は言語スキルの発達を妨害するという議論の根拠をつかんでいることになります。

次に考察したいマイナス要素は「学生間でのコミュニティの欠如」です。学生志向度や教員志向度のように、この環境尺度はアンケートへの教員の回答から割り出されたものです。そしてこの環境尺度は、学部生のピア・グループがコミュニティの感覚を欠いていると教員が考える度合いに応じています。コミュニティの欠如は学部での経験に対する大学 1 年生の満足度全般にマイナスの影響力を持ち、学生の物質主義的価値観に対してはプラスの影響力を示しています。

7. 調査から予測される結論 その 2

ここで非常に重要な意味を持つある調査結果を紹介しますが、これは統一テストの成績に対して影響力があるとされた要因に関するものです。統一テストの成績を左右する環境的経験はほとんどの場合、ほかの認知的・情緒的な達成項目、たとえば 1 年次の成績、大学院や専門大学院進学への関心、学問的な発育、価値観や態度、大学への満足度などを左右する要因とはまったく異なっています。合衆国やほかの多くの国々において、教育課程のあらゆるレベルで見られる統一テストへの依存度の大きさを考慮すると、統一テストでの高得点獲得を主眼において教育制度を改革する努力は、ほかの達成項目のいずれにも貢献しないということ、そして時にそれらの成果を損なう場合もあることを認識する必要があります。

ここでの要点は、必ずしも教育の達成度を図る上で多肢選択式の統一テストを使用することを否定することではありません。むしろ統一テストでは限定された能力しか図ることができず、私たちのほとんどが学部教育の目指すより広い目標に到達するために必要であると考えているほかの数多くの重要な分野での学生の伸び率に関しては、適切な尺度とはならないと推測されるということを指摘したいのです。

8. 終わりに一価値観の重要性

このプレゼンテーションを終えるに当たって、今一度「価値観」の重要性に関して簡単に言及させてください。私はいまや研究に携わる人々がもっと直接的に価値観の問題に関わるべきだと考えています。学生の到達度を測るさまざまな尺度を組み入れた初年次の評

価値プログラムを確立することの有効性の一つは、大学が自らの価値観を明確化することを余儀なくされることです。「われわれの正規カリキュラムとわれわれが好んで使う教授法の根底にある価値観は何なのか。」「私たちが学生の中で重視し、初年次の教育プログラムを通して伸ばしたいと考えている個人的な資質は何なのか。」「どのような市民、そして親、そして共同体のメンバーを私たちは育てたいのか。」「文化的な関心に対抗する強い物質主義的な価値観をもった人間を育てることはどれほど重要なのか。」「誠実さ、清廉さ、寛大さ、そして社会的な責任感といった資質を重要視することはどれほど大切なのか。」私はただ信じるしかありません。価値観をめぐるこのような議論が、どんな結論を導き出すのかははっきりとわからないうちは、ただ大学の教師たちに、このような価値観をめぐる問題について真剣に話し合うことからまずはじめようと説得することさえできれば、私たちの初年次プログラムは内実ともにより強固な箍がはめられる、と。

ご清聴ありがとうございました。